



A WAY OF LIFE

身近にある球形のものには、気球、ゴルフボール、真珠、ビーズ、シャボン玉などがある。また、“たま”という言葉には、命や魂、大切なものなど、いろいろな意味がある。あらゆる球体に興味を持った“球の研究家”森戸祐幸さんは、球体技術を駆使し、経営者としても成功を収めた。しかしその地位をあっさり手放し、新たな道を歩もうとしている。球体に魅せられた森戸さんの、人生における“勝負球”とはいかなるものなのか。



世界的なガラス工芸作家、ジョシュ・シンプソン氏の作品。購入希望の問い合わせは、株式会社キャピアールまで。

“たま”の中には 哲学がある

球体に魅了された人生

森

戸

祐

幸

さん

M O R I T O O Y U K O

1940年生まれ、栃木県矢板市出身。東京理科大学理学部応用化学科卒業後、丸紅などを経て、1973年に株式会社モリテックスを設立。同社は順調に成長し、2000年に東証一部上場を果たす。創業30周年を機に代表取締役会長に就任、2006年に退任。現在は株式会社球体研究所、株式会社キャビアルの代表取締役として、新たな球体ビジネスの可能性を探っている。また作家、作詞家、フータン王国名誉領事などの顔も持つ。

森戸さんが手にしている、ヤップ島を象徴するストーンマネー（石貨）は、バラオから切り出してカヌーで運んだ貴重な歴史的資料。大きさは数10cmから2m以上のものもあるという。

球体に魅せられて

球体研究家の森戸祐幸さんが球体に惹きつけられたのは、ビー玉がきっかけだ。人と違う、きれいなビー玉を集めたいという子ども心が、やがて球形に対する関心へと移っていった。

「シャボン玉はどうして丸くなるんだろう？ 地球は回転して夜になると逆さまになるのに、誰も落ちないのはどうしてなんだろう？ と球体にかかわるいろんなことを不思議に思った」

しかし、球体好きを本当に意識したのは、人から「集めてますね」と言

われてからだ。

「集めるんだったら日本一集めてやろう」と森戸さんは思ったという。

やがて光ファイバーの原料や極薄肉フッ素樹脂フィルムなどを取り扱う株式会社モリテックスを創業。仕事は多忙だったが、「みんながゴルフをしている間にゴルフボールを集めたり、“たま”のつく場所に行ったりした」という。

各地に残る玉造町や玉川のほか、有珠山、琉球など“たま”のつく



株式会社キャビアール

<http://www.caviart.jp/>

森戸さんが経営する会社。健康食品の製造販売、輸出入のほかに、アートマーブルやガラス製のペーパーウェイトなどを販売する。世界的なガラス工芸作家、ジョシュ・シンブソン氏の日本での代理店も務めている。



株式会社球体研究所

<http://www.spheretec.co.jp/>

こちらも森戸さんが経営する会社。研究開発や支援、出版業、有価証券の販売、博物館・美術館の運営などを事業としている。



『坊ちゃん物語』

森祐介著
ダイヤモンド社
1260円(税込)

森戸さんがペンネームで書いた作品。夏目漱石の『坊ちゃん』の登場人物たちの魂が、東京オリンピック開催前の東京で蘇る、奇想天外な物語。

地名は日本に170ヶ所以上ある。由来の調査やトピックス、寄稿などで構成された『SPHERE』という小冊子や『玉の博物館』という書籍も刊行した。球体への傾倒ぶりは徹底している。

多彩な球体の種類

球体には様々な素材と使用目的、価値がある。

「天然記念物もあればガラス工芸の玉もある。お手玉もそう。東京都美術館の外にある金属でできたオブジェは完全な球体です」

森戸さんは岩の裂け目に落ちた石が波に洗われて球体になった、天然記念物のポットボールを見に五島列島に赴いたこともある。パリの「ラ・ジェオッド」、ストックホルムの球形ドームなどの球体建築にも詳しいが、気がつかないようなところにある身の回りの“たま”にも目がいく。

デスクにはさりげなく球形の灰皿やお菓子入れが置かれている。コレクションは美しいガラス玉、ヤップ島のストーンマネー、コスタリカの

石球、2300年前の古代エジプトのビー玉と多岐にわたり、自宅、会社、母校である東京理科大学の森戸記念館などに所蔵する。

“たま”の中では、「ガラスが一番きれいだと思っている」と森戸さん。「ガラスは透明です。僕は水が好きだから、海や水滴やシャボン玉にガラスのイメージが重なる。川のきれいな水、水の流れをイメージさせるんです」

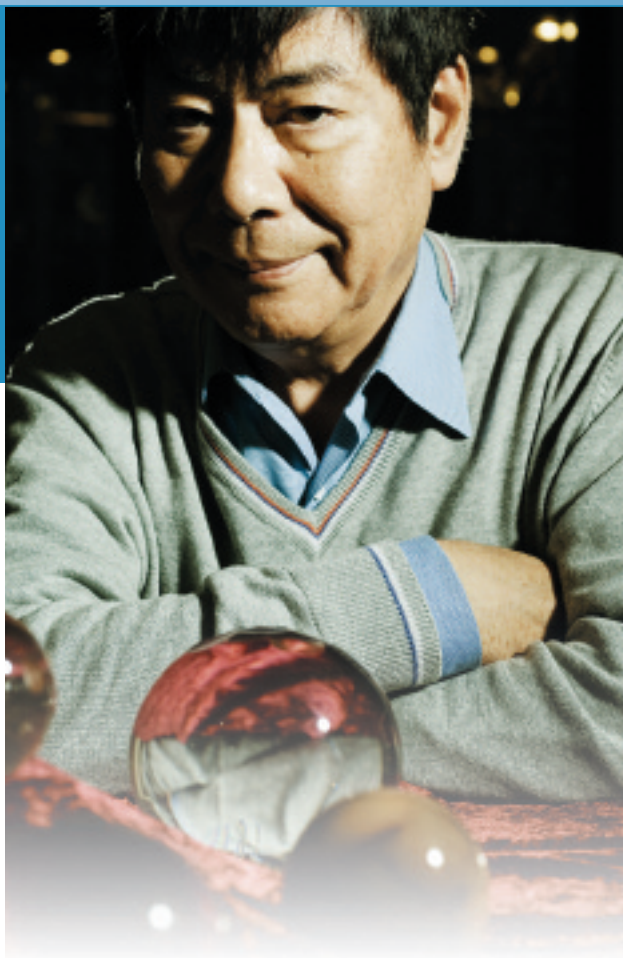
現在経営する会社で取り扱うガラス製のペーパーウェイトは、球形の中に惑星や宇宙の広がりを感じさせるものばかりである。

球体技術を活かす

“たま”というと大抵の人は“ボール”を思い浮かべるだろう。ただし、森戸さんには独自の解釈がある。

「ボールは風船やバルーンなどのレジャーやおもちゃ、スポーツを目的としています。

貴重なコレクションのスフィア。左上から反時計回りにヤップ島の木の実、フランスのペーパーウェイトをカットしたもの、中国の水晶、ベネチアのガラス球、大理石を磨いた球、オランダのガラス球、真ん中はルチル(酸化チタン)。コレクションは3万点にも及ぶ。



それに比べてスフィア(sphere)というのは、形が球状であるマリモなどの生物の場合や芸術家が創るアートの魂を宿している。僕はスフィアに力点をおいて集めたり、現地に行ったりすることをライフワークとしています。

また、化学反応によって製造できる球があり、1ミクロンや2ミクロンの大きさで揃えると用途が出てくる。それをマイクロスフィア(微小球体)と言います。地球のような大きい球もあれば研磨したパチンコ玉、火山灰の中の丸い粒子も球体です」

マイクロスフィアは尿検査や血液検査など、多彩な用途がある。

「重要な用途として液晶テレビがあります。ガラスとガラスの間には液体状の液晶が入っています。昔は25ミクロンの間隔でしたが、現在は数ミクロンで一定の間隔を維持するために球が使われている。球を置けば液体がこぼれずに一定の厚みを出せるので、スペースを保つスペーサーとしてマイクロスフィアがあるのです。

また、回転するさまざまな機械の回転軸受けであるベアリングは科学的な金属の球。これがないと機械が動きません」

モリテックスは光ファイバーや光学、検査・分析・画像処理などの精密機器の分野に秀で、2000年に東証一部上場を果たした。「目に見える“たま”と見えない“たま”がある」という森戸さんには、当初から経営に“たま”を活かす考えがあった。

「“たま”そのものだけでは商売にはならないけれど、球体を応用した何かを、誰もやっていない研究をしよう」と考えて、ビーズ玉を並べて絵を描くロボットを作ったこともある。

「A4程度のサイズに絵を描くとき、例えば3mmくらいに整ったビーズ玉を1万個並べます。手ではなくロボットが並べる機械を発明したけれど、高く売れなかった」

その機械で作画した森戸さんの顔は、1万個のビーズ玉=1万画素になる。絵としてちゃんと見られるレベルだ。こうしたユニークな発想の源泉はどこからくるのだろうか。

「アイディアは『なぜ、どうして?』の積み重ねで出てくるもの。例えばモリテックスで開発、販売している肌診断の顕微鏡は、レンズを肌のところに持ってきます。人間の肌を顕微鏡の下に持つことができないので、これまではセロハンテープのようなものを皮膚にくっつけてから見ていました。でもそれは機械が威張っているという発想。人間が顕微鏡のところに行ってください、といった具合に機械の奴隷になっている。そうではなくて、機械が人間に近づいてこなくてはいけません」

たかが“たま”、されど“たま”

趣味を追求してビジネスの成功に結びつける森戸さんの手腕は並ではない。

「努力はしましたが運もある。運がついたと思っても失敗したり、だまされたりしたこともあります。いちいち怒っても仕方がない。今はそういうもんだと思って悟りを開いたというのかな。悟りという歳をとったことになるけれど、あきらめと努力、チャレンジの両輪がないとダメだと思います」

森戸さんにとって“たま”とは、「不安定だけれど安定している」ものだ。その言葉通り、森戸さんは決して現状にとどまらない。モリテックスを上場させた創業社長の森戸さんは現在も同社の筆頭株主だが、昨年経営権を完全に手放した。まるでころがり続ける球であることを自ら選んだかのようだ。

「会社が大きくなると自由にならない。脱サラから脱社長へ。そうして3年前に、自由を求めて自由が丘(東京都目黒区)に引っ越してきた」と煙に巻く。

「シニアベンチャーですよ。歳をとっても世の中のためになるとか、ベンチャーで何かをやるという夢を持っていないと人生は燃焼できないじゃない?」と意気軒昂だ。

今後は“たま”をテーマにした球体デザインのグッズ開発を目指す。

「世の中にあるものを何でも“たま”にしたらどうやと思ったことがある。まん丸い携帯電話があったら面白いなあ。どんどころがっていきんだけど、止まれと言ったらピタッと止まる。スフィアとボールが合体したら面白いよね。ワッハッハ」

豪快に笑う森戸さんは、性格も丸くなったそうだ。

「“たま”には哲学がありますよ。人生みたいなものだよ。とりとめもないし、つかみどころもないけれど、面白いし深い。生き方も自然体になるんじゃないかな。動物も人間も、地球という“たま”の上の営みの一部分だから」

森戸さんのアイディアと好奇心は、球形の神秘と実用性、遊び心を追い求めて、今もお勢いよく回り続けている。

Text by : あずま順